玉敷神

五

へ遠/13
984
5

遠門
號 984
卷 5

生死流轉玉散袖下巻

東里山人著

明治

若山屋伊助

第五回

電光石火の影の中ゑ生死の去来を知る説話

實ゑ定めなきこの浮世なり昨日の花も今日散て。飛鳥川の淵瀬常なく移び流るゝ月影も。蒙霧の雲霧ならぬ。笑やさ山ゑ。なく子規。雪ゑ迫門家の怒ゑ行。軒端ゑ告る欸然鳥。聞も看もなく。誰ゑ無常を視ぜざん

爰ゟ長兵衛夫婦ハ。躰玉五郎ゞ不測の罪。遁ふ難きよ〜
を。聞〜只管悲〜〜。爲左杜右と。暫〜途方ゝ暮くゞ。
阿弥太ゞ諫めまちらを得〜。これ幸ひの奉公さゝと。おとくゞ
方へ。玉五郎ゞ身の難義を告知ふせ。扶くゝ其仆ゝ。岩永
さゑへ。牝成〜〜。不測の罪の遁るゝ。討ひられよと憑ゝ
其安否を待ぞと。知ら紙どゝ。急ぎの用るゝ。おゝくゝ
早く封ゝ切り。見るゝ。あと正躰も。ぎき哽びたる一下間の
ち。涙ゝ胸も張裂ぞゝ。繰返〜〜〜伏搏び。巻〜〜

讀て。袖を絞ゝ。吾身を憫。慟世を恨〜。前後不覚ゝ
くゞ。漸〜〜ゝ心を落付。等閑ゝ。ゝ夫の命。際ぞ最危
と。度胸を居たる婦人の一念。何ぞ元陽ゝ謀立の。志業もあり
と。思ひれ〜〜。平日より立派ゝ粧ひの。姿もグッド仇めゝ美容
の媚。蘭の香ゝ。愛敬含む冨貴花の。色ゝ枝のゝ足
せ〜。酒の御酌と立出れば。常ゝ〜〜ゝ持賞ゝ胸ハドキ〜
氣ハ〜〜身柱ゝ。ゝ凄冷〜〜。今ハ何をゝ岩永左衛門
綿のゞ〜ふ。意蕩とゝ。

そ〜〜ゞ酌で酒呑ゝ。楽んで

居さ心ゞ届き。招ぐと裡室へ来るとゝ。コリヤなまゝねえ〳〵
先斯眺望ゝ吉野立田の花紅葉更科田毎の月よりも。
今日格別美羅〳〵。サア〳〵女中〳〵酒持〳〵来よト。ぜひ
ハット従女ども。銚子さうだきとりぐ〳〵よ。暫〳〵酒宴ぞ始まりる。
御側よ隨身女中達ハ。粹を通〳〵一人立。二人三人と退去び
主君の接媒よ〳〵の川。妹脊の中も紆廻〳〵。夫想ひの下圖よ
おとゝ〳〵。岩永ゞ傍へ身をよせ〳〵【と】報ふぬ身の賤しき迫さ
君の命せもとゝ〳〵。御請ケスもあり〳〵ふ空恐怖〳〵き

るもあり。とゝ。ゝ。ゝ。ぐ〳〵吾身を顧看ゞ。斯ぐ〳〵御情深く。夜
ふ増日よ添〳〵。綿木ふ〳〵ね有難き。言の葉も子束よ余り
ゝ〳〵ね真砂の濱子鳥。〳〵らふく思ひゝ〳〵まれゞ。ともふ遠山
の雪をも孫ゞ。ふ〳〵ね間の折を得ゞ。ふ夜の梶も川鱒の
水よ心もさゝ〳〵。風情を色よ顕ゞ。岩永溜息ホット突
【岩】眠まゞ眷よ面俤の。ゝ〳〵ふ〳〵間とゝふ女微もふく。覚まゞ
姿ゞ目よ繦ゝ〳〵。忘ゝ〳〵潦もあきゝる〳〵さ。況や顔をえる
度〳〵。心もゝれ氣も遠〳〵。躰も解る様ひふく。朝夕閑と

胸のうちを最哀とあるゆゑ其件の諸粹ぎやく
四相を観る重忠さま。煙哽あるゆ契岩永。麦分よ人ゆ得ま
らねば。そ〳〵ゆハトシト一言もあひ閑口ぢや〳〵是も結ぶの
神るゆ。かるくば其件ハ嬌態ぢやトひぶるるれて【ち】いつもじ
いるも面難胸のうちゆ心障アの非〳〵ゆ。契ゆも仇よ捨て
られ〳〵。吾倚ゆ夫人殺〳〵の逆逆よ。聞てさく神驚き。獄
屋とやらゆ繋ぎ〳〵よ〳〵。その仇人もあま中ゆ夫婦の。縁を
結び〳〵ハ二度君ゆ身を任せる。女子の道の常ぢゆ。

前其下三

人の嘲哢も最恥じく。ゆさ君ゆ不義の御名をもさぶ
皆ゆさ〳〵の。身の徒化ぶと。男姑のゆまくも。しろゆく
ばくハ只。吾倚ゆ身を。御不便とゆあゞ〳〵め。御情深も。
ゆさぶ。玉五郎ゆ罪を。御免〳〵。獄屋を出〳〵ゆ。吾ゆも
遭〳〵ゆ。霧ゆ命を。ひたをゆしるゆを恩ゆ捨て。夫
婦の縁を切。斯ゆ。ゆ今霄中ゆ。孫舎を退去ぶ〳〵と
しん。真実ら〳〵言の葉ゆ尾ゆ尾を。付くいひ聞さぶ。君の仁
恵ゆ命を拾ひ喜祝他國へ駈行ぶ〳〵。されば吾倚ゆ身

操を守り、心も貞堅く。御前ゐもせず不義の指図なく。
それ〻心の下紐を解とも誰あら悼らんとやもたゆらんの糸
柳。嘲もなき風の吹くに靡く光景よそくなれば岡ゆ
花水橋の邊りなく。人殺しの玉五郎ハ。そもじが夫で有るら
ア〻命冥加よ余じし奴。紛失なる三百両ハ父長兵衛より
贖ひされども。狂らざる花脚を害し罪人首を刎ず奴
あれども。そもじが心よ馬され〻。ぞやは岩永が赦〻き新
とよひ
今齊五の疵を相圖よ。獄屋を出し書院の庭へ呼出て。

そもじも遭まるやどれ。コレまあ婦の縁とかあらば。忠小まい
ぞよ。思ひ切さるの跡で是非論なね。化猫門が后の妻と
女房ども酌あ〻ア〻。盃器一ツ呑干て。羽織姿い子鳥足
表の口へ立出く。何ら潛然蜜淡も。獨ア茶坪よ入り人の遭
も。無常よ暮て行。心も細き長廊下。後行燈の明ア人影
ぬ。夫の身のうへを心て哭く。外ア敷ぬく色の美ひ良
客類ぞ石便あり。岩永ハ立戻ア〻サア〻おとく。酒呑よ〻
玉五郎がるも安堵あられよ。今よそもじよ遭せくるト

聞くお徳。嬉しさと長き別れの悲しさを。思へば何と返
答も。あくまで哭き主君のよまへ酒の相手の銚子より。胸の
あくとそ苦痛なれ。翌日もあくば。今日をも斯やおひやん。
昨日の暮そ昔なりける。爰は玉五郎ハ。測らざる人殺しの
罪を得く。獄屋は暫時輟れし。秋去るの。桔梗花泪の
露の玉散て。衣かたしく死小菊よ。あくや霜夜の蟋蟀。日蔭
よ痩る面俤も最愁なる種瓢。色青ざめる玉五郎を
引連行んと。欲張切蔭用捨も更なあら氣あく。縄付来る。

とふ声。玉五郎も死罪なし。不測の罪の言解も。御聽
に達あく今骨限り。首刎らるゝ罪究まるゝ。思へば〳〵
残念なるに。過訛く紙入を落せしより。係る憂目の恥を
さらし。両親を悩ましかけ。不孝の罪の災言他も。黄泉の
下うらめんと。奈何宿世の因縁とて。哀なる悲しき墓
あひ。死よりなをもる者。亦とあらぬ。アノおとくめ見ゆへよ
義理一偏の奉公しく。知らぬ死んゞと聞なら。便りあき
身の嗚やさて。吾身のうを恨ぐし。吾身は覚へ有れども。

人殺しの罪と決定されて。首刎られれば其孰名は未代まで
も。口惜敷テモ憤意やと首うなだれ。思ひぞ絶えば落涙も
今を限りの命とおもへば。羊の歩行。屠所の駒。一下足づゝ
消へ行。義の命ぞあはれなり 四ヤイ早く歩行。時刻が延久
らねばお差ぐ。夜張中引出されて。寒ひめまるト云理を躾
よ。急ぎ〳〵奥の書院の庭の外。切戸の口を引開く。玉
五郎を押入る。縄を外し〳〵突放し。切戸を閉て切籠ハ言
をも。詞を立去る。玉五郎ハ起上り九右を首べ。塵を祓
芝間ハ清き細流。振ハ紀寐ハ苔おせる。石燈籠も雪
見形。冬木の櫻刈迄の。葉ぐ〳〵ふらる月の影ぞ。あはれ
御庭内と抑ぬ。今ぞ其を突放し〳〵。飯ぬ〳〵ハ不
審意。ふ縄目の恥もあり〳〵。義を現ら義あり〳〵。覚て思
の増ひと暫〳〵惘然。彷徨と坐せる後へ。ぞんぐりト
立る婦人の溜涙ハラ〳〵ト。玉五郎が良なかれば。亦心驚 玉
おもへハ誰じや何人じや 三アイヤ〳〵やおもへの女ぞ。とゞぎ
ぬ。玉ヤ〳〵其方おとくらさまれば。愛ハ岩ハ永さ及の

御殿の御庭まあり〻〻〻[図]いらゐもさあ〻でどざうまん。夫が。今般の御身の御難義。御両親さまらのおみゆ。巨細容子を聞まあ〻〻[図]あ〻それあれが改めく。いふまでもあい口惜ひるゆあぐら。不測の罪の言解立ぞ。獄やゐ繋れ此通痩労衰さ身のあんぎ。今霄是ゆで来るうちも。定めて首を。刎らるゆ〻とあ〻ぶ。一ト足も向方へ出ぞ。息ざれまるをも漸〻ふ。爰ゆぐく歩行く来さふが。此更突殺され不審ゆる彼ぶ。爰ぢらあいゆ。心のうちぐく哭く居る。白くかゝまる鰐

時雨。それあゝぎりしとそれが其方が涙の雫。ざやゝさうけで爰へ来さのぞ[図]その御不審いさるゆあぐら。爰とえんゆゐ理あゝぶ。此あちんさゆのおみゆ。さゆぐく心のあゝぶさけいぶく品を換くされども。どとも叶はぬ人殺〻の罪首刎らるゝふ宛ゆくされば。是非あきるゆとおゆひあぐら。ゆゝく無覚の罪。遁るゝやうふ吾倘ようぃ。岩永さゆへ直くよ。牧成〻とのおみゆをアとく。胸がいつぃい讀も悲〻〻〻〻。躬ゐい。吾倘ゞあゆもたゆの夫等閑あゝぬと岩永さゆへ

嗟嘆て。いきみの所為をヤあげ。孫ゞやさこさて一の一子念ゞ
今霄屆ひく。おやさの御赦免。さうあゞら岩永さゐの。御
心一ッでお討ひ拵び甚び。遺念の卿よ在く。人目よかくらバ孫
罪よ罪を重孫却く嚴きあ。あ。示遭るのあゞられば。
直さゐ今霄何國へありとも。立退せよとの自身き御言葉
辟言萬里を隔とも。命さくあゞらくあびまさ盗坂の関城て。
夫婦の孫しかからドトいさ紐のゞをを玉く呑ゞけあい其
方の心ざ〜。女ゞくどん思ひねゐ命の親。さうあゞらさ跡で

そのあとの多よゞのゆうな難義ゞかくく。命ゞでも失ゆかうみと
ゞ。有とん式玉五郎ゞ萬助さゐへナシ訳ゞあい。迚も式多ハあ死
命と。覚悟きハゆ〜〜くあれば。首刎られても大るゞあい。其方の
多よ怪我過ちのあいちよ。暇を願ふく雪のあく立くり。
吾多を思ふく〜呉くゆら。老人二個の面倒ゞくく。御両親
の。二十四輩須拝さんゞく御帰國を。待くちらも隙あゞ
其方のロくら一偏の。南無の雫を黄泉くら。受るゞとの
多の望むおとむ〜ゞ知らさる。互ひの悲〜〜 [illegible] イエ〜〜

あんの死ぬまで。夫婦の縁〳〵あり。あるに。嬉しいめを見る間もあり。兄さんのるよ中隔をく。くらまで他國へ遠ざるとも。再度會て添寝の枕。爰の見肥をせめるもい。命が惜ふぐろまく。今かうめことそ祐ひ。夜の更ぬ習よ坐ともあく立退くもさうもせと。鼈甲の櫛抜とりく。鬢の乱きを按付る。生死流轉の前後ろ。杜をそゑれて契月よそうを頼ぶ。契世の名殘アトいちぶ〔玉〕そんあら其方も。息ぎで夫婦の。縁〳〵いうらぬそや〔ま〕ま。あるもおきめで遣ぎでを。うるぶ

待〳〵ちさうもせ。雪のトへい秋御庭の切戸を開く〳〵真まぐふ。向ふく行と非常口。御門の疑も明〳〵もあれば。出るあんの左右差もあり。外い眼眇の一ト筋道と。慥よ聞く〳〵。夜更の道の氣よかくまぶ。氏御寺と懐中あく。何平行ちさうもセトくぶまるぶ〔玉〕これい日外母人よう其方が儀られく。御関山の名号ぶやあいう〔ま〕アイそのお名号で。ぐろうもあ〔玉〕ぶやくまあ有難ひるのへ。他人の中の突會ひ其方が乎ぶよるぐよい〔ま〕イエ〳〵それでも氣よかくる。秋の

道邪ふ乎ふも沢山あれば一偏懐中あく〳〵行く。ぐさう
ませ【玉】そんなら是を其方と思ふと。持く行きまする【ぎく】
ふて有難ふござりまする【玉】くまくも忝けない
其方が今霄の真切へ生く世〳〵忘まいせぬト別まの涙ぬ
一ぱい切ふを開く〳〵立出る。玉五郎が袖を引とめ【ぎく】たとく何
年歳立とも吾儕がまのう音信をかまくば待くぐさう
ませ【玉】女ぐうとのひ。今の親百年立とも。異妻を迎える
心があらうぞよ【ぎく】とれぞろうを楽こふ。奉ふまく居ま

まる。コレカレ今一度。御良をふせくまさうやせト玉五郎が
しろ姿ふ送るおとくが一生の別まと。脳ふ覚悟の涙ふと
ふくまね私言い。哀働ふまさ健氣ふり玉五郎ふ測ざる
罪を得く。獄屋ふ繋まし。がやまさ測さるおとくが真実ふ
ふう。恐虎の口を逃まと。毒龍の蹄を免れく。義路ふ
空行ひしふ。三更の撞ふ送られて。漸〳〵と吾家ふ至り。軒
端を傳ふ玉水ふ。敲く水鶏のそれふくで音信声ふ慥ふ
玉五郎ト。長兵衛夫婦飛ぐいでこれば彷徨と立さる涙女

色憔悴して然まさに。偖いまの死を急ぐ。成佛も
中ばに遂ひ来しか。不便のものやと向の河字。唱へ来時も
子ゆへの暗。涙は暫〳〵まとろむ。玉五郎も獄屋の苦痛み。
斯枯槁〳〵形容とあり。今霄測らぬ死を免れ。夜は紛
〳〵立飯アリ〳〵も。種〳〵の説話あり。そもは涙は喚び呼ばば
夫婦い大きに驚動ふ。嗟きは泥む身は無入り。鬼魅の
形ひを移を假ア心の中を幼惑は。来まるものゝ不審やと
半句い暫〳〵実とも知ひざりし。玉五郎いおとくが真実の

譬喩ありもあり。吾身の難義を推量よ。不測の罪の
身は覚ゆれを。竊は岩永さまへ言解き。今霄まらばも
危き命を拾ひ。其罪を免れ〳〵。もろさく集が孰成の。有
難きよるりのありトの詳に両親へ告く。偏は吾為めの
命の親と。其恩義の功あるを。再三いひ述く。落涙の袂を
絞アる。長兵衛も是を聞よう。偖い我〳〵憑ミ〳〵心を。生家
〳〵。等閑ふく玉五郎が身の災難を。救ひ呉〳〵ハア奉
ゞけあき志義。あつぱれ列女の鑑とも。あるべき者いお徳あり

と。天を拜し地を拜し。親子三人抱き合ひ嬉し涙に伏し
ころび。孫子責て忍極せり。斯せも玉五郎が。孫金の里に暫
しも。あを見ずして叶ひがたれば。赤涙あぶらに成るを物語
り。旅の用意もそこ〳〵に。夜の明ぬ内と急ぎ給へば。母
親もこれを止めがたく。おのれ一つかまねるの
憂やつらや。親子の孫もよく〳〵ふ。孫金の里に暫く
一日あると吾家に止まるおられぬ悲しさ。あせも重き命の
換へ。こまえを出で〳〵思ひあぐ。都に吾子の俤とあり

お徳が心もこそ〳〵ふ。ふたゝび招ぐ情けの涙科。武士と
ふ俤と可見さよ。見非もあく〳〵別れの涙ぞ止めかひなる
親よりも。名孫を惜む子心の。姿悲しく見えよろ。見よう
王五郎八俤と紛れて。孫金の里を立退き。豆州あさ
ましう。泥泉に俤に。嘆き〳〵。爵勞の身を療まし
来よう。父も子孫が由孫の老。京都姉小路にあり給へば
見が方へ俤ん。るの。ろ〳〵くのあひ立あれば。下田の湊と
より。俤を求めく志州鳥羽の浦に赴き。又渡乎

浮の。夜毎よ寄りて。恙なく京都へぞ帰りける

〜〜〜

咲ぎろ夾の花を咏め。空腹のそらを拭ぐ。ひとり秋の
月をうんろ。心地まるるそそ可笑しくれ。おとくふを君を欺きて
夫玉五郎が。危難をきくひ。ようやく亡き身と見て悟
を。究め已に自害して。吾偽りの罪を他せんとおもひ信め
しぶ。又暫し志業しつ。ぐうこぐらら白双に伏きとも。ぐどら
ふ後とあぐ。ぐきん。却く欺きたきろし。その罪を多こ
聖の下ある由母親へいろ。多難義がからの。恵の他
こそ。厳しかんと。利毅ゐめ。さふ府ぐくい吾真ごろを

白地言いきぐ。死よく主君の御よかろ。ぐ。係る思ひもそる
ぐ。と夫へ立る操の一念。凝拙まし。竟神。仏ありのとぐ
見ぐくふる。斯く物忌の日數も過ぐ。おとくふ今日が。世の
見おきろ。それと。色あ出さ。弘ど。暫しやつふる。婢女。
まへも。それく衣服の記念。配。心の中で。暇乞。只名残おくきん
父さ母さぬ。ぐんふ斯とろ。親ふ不孝の多の行狀。おこそ
くよ。吾偽まで。さ。ぐろ。孝の多のくそ。死んぐ。跡おく聞
ぐろ。さ。ぐ。恐ろく。お拔ぐ立ぐ。ぐ人。あるのそのうちぐ。

一人ハぐめぐ親の氣の。安堵ヲ〻〻〻

心みんがりひもよらねるのぢやとの囲さもれば玉五郎と夫婦の縁を切らふとりつるも[点]ハイとみ俗りど囲女わるるよ聞とりつるのも[点]アイこそぢやうとの聞より活と堰立岩永可愛さ余るく恋さが十倍囲ウくこの虫螻同者の甚方等が口先み欺むられさト言まとんぢ宗連が弓矢神へ對して済ぬまへ操を立るとりつく主を欺むく大罪人列女と言がくく我素より你が心を引んなあ意よとのせ玉五郎が身よ不測の罪を塗せ〜も吾一ッの計略あくいよく〜麻非く

氣色もあく死を誘ふあるを心底あくび命を赦けくぷろ代列女の盤と言をべくと深くくと某〜を女の智恵の黠〜〜夫の命を助けくとく虚偽やの言葉をかざろ主人の心を欺むくとん畜生あも劣ア〜根性活を〜びどのやうな謀をあるんも斗ゆまがくく〜ア〜とるか極恐人や見悟ひろげと短刀を接び玉ち氷の白刃あとくが目先へ突付〜〜サアどぶぷトいりのくコレおとく換代のあき物い命ぐどよ苦痛〜〜後悔あるよりいよと偽く麻非く

呉よりまゐる来練の鬼薊菜。の針の恐怖く[illegible]
ふかく〳〵の覚悟。身を忘れぬが業泉の土産。御
前の御氣の海ゆゑよりよりの殺〳〵ちさうの色ト記られも
[illegible]言みやわすがん望ゝの通り。地獄のいとまとくせく[illegible]ト
髻捆んく峯ゆよ。碎〳〵落る鼈甲の光ア飛去る光
景ハ。兩佳景ゆ稽妻の。散蒔くどく足ふる。尚も思ふ
せら知ひとれらハ心の侵の慰殺〳〵ゆ左衛門が法らみ
料理の。庖丁塩梅ゆせく〳〵。肋骨から立割う。肝

先ら切割うう。ゆゞ爰らう坐とゞト股を死ゆ〳〵。ト
鄙繰り。おゝゝゝ[illegible]ト仰俯み。倒る〳〵据ゆたる血煙ア。苦痛
ゆ。堪ゆ這ひ廻る。首ゆ[illegible]無図く就鳥抗ら。ウレ騰竜ゆ
ゝゝよとプツリト通を肋の危所。歯咬メく身を震せ。
虚空を掴む。七轉八倒。修羅の街の四苦八苦呵嗔集
獄火の。苦〳〵ゝも是ゆいるで勝るべきト狂乱姿も血染を
秋心ゆもゆゆ凄ゆ[illegible]ト痛ら〳〵。ぜんおらう〳〵ぽもまく
立る操わコリやるゆ〳〵面白ひゆ。石橋の獅子ゆら牡丹ゆ

狂ふ而他るゝ。備も又〻〻〻。行やそや牡丹萌と。ゆく〻〻
とまをおりあさる。是が夢世の名殘狂言。婆婆の足あさり
又〻往生と。咽ゐ。ゐ。ゐ。

それとは知らぬ。実の子と十分おもふて。誑欺され〜心の中の。恥ずかしやその嬉しさよりうく。再度吾子の死骸とは。偖も不便や淺ましやと。涙あらら葛籠を引とり。供〜来たる阿孫太よ。それを脊負せく。主従あく〜雪のもく立戻るべ。女ぐるもはるぞといきみの說話を聞よりも。愕然泉く涙ぐむ。哽び。吾子の死骸ときく悲しさ。葛籠よりは早く出きあぐむ。女子の愚痴ぞは理あり。長兵衛も手頃日は月日星と憂きあらる。玉五郎がるの。あり世ば。死よ良あらと今一度せく〜ふさく

聖辺送りと。葛籠の紐も解き〜。心もいそ〜細しをとく〜と。謎あの者の。命。蓋とり除く〜より〜それぞ玉五郎

あれあく〜ぞ。おとくが死ぐるよ。[名]ヤアく〜こりや玉五郎ぢやあの。お法が。死骸おや子ねぐらく〜。殺されさあアコレおとくョぐらく〜

伏ぐ。ぢやるる母鳥のあるく〜られタコレなさ下言結ひく

知らぬせく〜くるとやく。それ母の止り鳥も患ひあるぞ。女ちくも現

[illegible]。おとくが死ぐるよ進寄く。[文]かくいるるもあらようとせ〜ぐ

あく〜せく胸騒きおんぐて居と其方の名のくはのはとんる

嘆〳〵の死よ良そ。なく〳〵哭せくもするぞや。せあく一トとゝ
ゆゝしでも。兎ゐらせ天ちさらね。それば覚悟の死ゆ哭〳〵ぞく
はしらくゝ婚礼の。とゝよ岩とゝ来さ大振袖。留くかぶえの
悲〳〵さや。まんぞ羽二重あ中〳〵。脊中よ徒せ〳〵六字の名
號 ㊀ヤア〳〵えんあら見修〳〵。殺されるゝト直胸よりあ
むへさゝよ玉五郎が。口より聽〳〵おとくが真実命を殺さ
ゝ捕りよ。若殺されゝるもあらば ㊁ヨ〳〵も夫子の親を人
あんと云沢殺〳〵ませゝ ㊀焼世の雑子夜の暮 ㊁子の

嬰懐ハ誰親も ㊀ちゝしるゝハあくぞうゝ夫婦偽ともあれ
ゝ合ゝ。みも涙よ嘆ひくゝ。偽も斯ありく奈何ゝと。悲嘆む
ゝ。おくくゝ命。難べき事もあらぐれが。是非あく苦提ゝ冷
風ゝ送ゝ。直ゝく葬式をぞ営く七〳〵日の追善よ泪の
就く隙ハあくれど。生ゝ来く仇よ無道世をゝれと。義く
飯ゝ子ハ智識あゝとゝよ〳〵ゝ願のありがゝ死を飾べゝる
夫ハさゝあき再下説。岩永左ゝ門が恩顧の良等。欲弥
切ゝ孫よ一人の娘ゝ名を早咲と呼びく。今年十七ゝ

ありふる。母は七ヶ月余り三ツの月嵐の花と散去りぬ。去き
人の粧よりなれば父は深雪といえる家女を。后の妻と定め
去者は日こそ疎ありぬるが早咲は悲しく。継母のよく育
られく。義理ある中の親子とぞ知れる。斯くて世は隔て
母の。継子を恐るるは。和漢ともに其例多くありて。ひたち
〜きぞあれ。私どの。芝切殺が妻の深雪は。ひたすら早咲の
成人よ。さぐり。焼婚態容貌を。ろくよ付てもいまだ〜く
まく吾眼まの。出生の子あるれば。継〜い集ま婿ふとりく。養

あるまえるの。口惜さよと是を憂ひの種と〜く。絢はたく
火の結るまるあ。心よ思凝の恐念を醸し。かくは家中
あり。秋連夏門太といえる若りの。早咲が尋常標致は想
を。縣るよ〜聞るれば。ユしよ死謀計のたくひありと。心の中は
深く欲然。ふ。ら。ト去さ〜ふく。早咲がもとより多つを
かく。贈まるよ〜ゆく。竊に人傳よを得く届けられば。妻つ
左ハ。これを見るより。漫ちよ。のこれよる。心のうちのあり式を
かきこと。既く返るのあ〜れハ。母の深雪ハ是と。ふく斯とを

あふんとやるく其うへを彩雲のそれまちあきらめよ。継母のつまこと
かしあどわぎとあそくく。心よきそふあくきの。罪深くも吾が恩
髪の肩ろろを君あくぐ誰ぅあぐべき。徒然よ咲恥辺のそれ
え捨くあぐいうあせん情もあぶびよとうく。土産の旅めさも
あーあうれとのひかりそれば妻門左へ。係る継母のそくとも知で
実よ早咲が心のくみをちくせーりのト思ひそれば忌ぎ紹介の
人を憑くく。婚姻のるをいひ金ろるよ。切羽ろうちのかの。不
兼知あく。ことふ妻のちへ近き頃。当家へめー抱へられて恩と

僧代の去あもあふ。且へ敬蕩よ方あの若りのくよーぞろく
吾娘と。縁組せんあどそん。ぜりひもよふぶと。不話却怒る接敢
よ。媒妁のりの当惑は。是併あぐら世よ。相縁奇縁とのふと
あり。譬両親の心よ叶ぶるも。子の心よ叶ぎそへ曲く。是ふ嘘よ
るもあり。一個の不筒あも。あくるくぶるりのありと。寵よ早咲が
絢の中を問きくよ。素より望むぐき男あもあふべ好むぐきあ柄
あもあくぐれば。父が心よ相同ぐと。素慕氣色も更よあうりしぶ
いひのまーあ。あきる赤面くて。手空よかまを辞ー。直さあ

ヌタ門太方は至り。爾〻のよ〻を告く。偖持もあき男らるゝ我
あ。獣子の口きらせ〜と。耻メてど飯ヒる。麦つゝ是を聞より
心中は深〻早咲を恨み。係る艶書を戯まく。吾貞を疑はしむる
る。言語はゆの行狀あり〻ョシ〻〻今よりよ。妖爵債をそらさて
あどらあくへきゞ。狂は切羽ゞ言偖の面魂さ。親子法とも吾為の
仇敵き。ヌどゞ〻〻〻〻〻〻刀の目打あゝ〜合をる膝とな
心のうちは志安〻〻。折も都合もよゝ暗の。星さく闇き夜け
ま〻。とれ屋敷の幸ハと。吾家をひそうは恐びいでゞ。ゆ義ク

住居を聞ふ不敵の行狀。夜とは殭は潛然と。世間も靜
まる夏寅中。嵐の破棚の隅星点〻降出も雨足の音と
凄さは忍び入ヒ尚も容子を伺ふ。哀ヒとも〻よ〻〻
やどむ〻〻。れぬ〻〻訪もゝ〻せり。爰は早咲ゞ多の〻〻
継母のみは欺むれ〻。偖も危きるあり〻。ゝ式巻は
いひ残せ〜報〻のまま〜。其二の巻は〻〻〻〻〻〻〻〻
首尾を全〻ふあり。爰世法師の〻。萬助は〻〻二十四輩
頌拜の〻。福分玉立帝〻多の〻〻。阿弥太あ〻びは多〻〻

切花深雪早咲多るが。奚先の說話ハ奈何それの巻より
解分を聽べし。

玉散袖下巻畢

新共下二十九

文永堂藏版目録　大島屋傳右衛門梓

人世栄枯松の操物語　中本三冊　一筆葊可候作　後編　溪齋英泉画　近日出来

花暦八笑人　初篇　二篇　瀧亭主人著　歌川美丸画　全部八篇　追〻出来　溪齋英泉画

生死流轉玉散袖　前編三巻　東里山人著　同　後編　巳巻　溪齋英泉画

浦里時次郎後正夢　中本三冊　瀧亭主人作　歌川國直画

鶯談傳奇

山東京山作
歌川豊廣画　全五巻

文政四辛巳歳春發兌

東都書肆

山田屋伊助
書林

鶴屋金助
大阪屋茂吉
加賀屋佐兵衛
大島屋傳右衛門梓